

鞭牛和尚の道供養碑

文 中野 東禅

山の緑は、目にしみいるほどあざやかな季節になっていた。鳥たちのさえずりが、樹から樹へこだまして、澄んだ空気の中へ自分がとけこんでしまうような、そんな錯覚をおこしそうな午後であった。

がけ下の谷を流れる閉伊川の水量はゆたかだ。雪どけのころとはちがった清冽さが、晩春の空の青さを映している。

「もうじき梅雨だなヤ」と言うともなしに、ひとりごとを口にしながら、男は背中の荷物をおいなおした。つゆになってからの、この道は苦勞であった。雨の季節になる前に盛岡での商用をすませて、宮古までもどってきたと思うのだった。

道は山ぞいに曲がっていた。とつぜん人の気配がして、石を打つにぶい音が、前方にこえた。男は、宮古で聞いたうわさを思い出していた。“岩屋のほいど和尚さまが川井村の川内渕の上の難所をひらくそうだ……やっぱりほんとうだったのだ。”

そして同時に、途中でみてきた五つのまあらしい道供養碑を思い出していた。それは前の年にたてられたもので、茂市村の腹帯、下井川、さらつぽ、ふぐとり、臺目などにある、道供養碑という珍しい石碑だった。

農繁期のせいか、人足は多ぜいではなかった。あるいは、まだ本工事になっていないのかもしれない。

旅の商人を見つけると人足たちは手を休めた。その中に黒いころもを着ているとはいっても、しっかりとたすきをかけ、百姓のはくももひきのようなものをつけているたくましい人がいた。頭はたしかに丸かったが、色は黒く、ほこりっぽいその風態は、ほいど（こじき）のようにさえみえた。

しかし、がっしりとした体つきと、見ひらいた眼は、一目見ただけで尋常でないものを感じさせるのだった。

その和尚さまも、手を休めた。手にはつるはしをもっていた。

「ごごろうさんでございます。」商人はていねいに村人たちに頭を下げた。そして、和尚さまに向かつて、「おがげさまで、おれだすまでたすかります。」となんべんもおじぎをした。

「おがげさまで、この街道もあるぎいぐ（歩きよく）になりました。とごろで、腹帯や墓目の新道で、和尚さまが建てられた“道供養碑”っていうやず（もの）を拝ませてもらったんだども、道供養碑つたら（というのは）、どったな（どういう）もんだべ」とたずねてみた。

和尚さまは、ン、ンとうなずいてから「むがしハ、道が難儀で人がいっぺ（たくさん）死んだり、けがしたりしたもんだ。こうしてみんなのおかげで道がでぎだんだども、これからの往来の人が安全に旅ば（が）できるように願かけだもんなんだ。ンで（そして）、なんぼ（いくら）人さまのためだったって、岩石もほどげさんのからだだから、砕いたら供養すのが、仏法っていうもんだべ」とこたえるのであった。

この、ほいど和尚さまは、名は牧庵鞭牛ぼくわんべんぎゅうと聞いた。

ここ南部藩（宮古から遠野領―いまの岩手郡）の、北上山地と陸中海岸にはさまれた僻村に、岩をくだけ、道をつくった曹洞宗の禅僧であった。

鞭牛さまは、その開鑿かいさくした道路ができ上がると、そこにならず道供養碑をたてるのであった。おなじように川に橋を渡しては橋供養碑というものもたてている。

こうした、道供養碑、橋供養碑が日本中にどのくらいあるかよくわからないが、鞭牛さまにとって、それは信仰になっていて、しかも、生涯、道供養碑を建てつづけたというこゝとで、特筆すべきものであろう。

その道供養碑には、いちように“林宗六世牧庵鞭牛”としるしてある。橋野村の林宋寺六世の住職であった牧庵鞭牛がこれを建てたという証拠なのだ。

そこには、道に対して、人びとに対して、石に対して、万感のおもいがこもっていることがわかる。

だが、農民とともに生きたこの人を、牧庵鞭牛和尚とあらたまって呼ぶ人はいなかった。なりふりをちつともかまわなかった鞭牛さまは、こじきのようにみられていたそうさ。それで部落の人たちに、ほいど和尚などと呼ばれていたものだ。いつも、げんのうやのみをたいて岩をけずっていたので、げんのう和尚さんともいわれていたそうさ。

川井村あたりの道路普請には、岩屋に寝泊まりしていたので、岩屋和尚さんとも呼ばれていたそうさ。

そんなふうには、人びとは語りつたえたのであった。では、なぜこの人が道づくりはじめたのであろうか。そこには、飢饉とのたたかいという、悲惨な歴史があったのである。

（つづく）